

釜石の希望と誇り

—同窓会調査自由記述の分析から—

石倉義博

概要

岩手県釜石市内4高校の同窓会会員を対象とした調査において尋ねた「希望」と「誇り」に関する自由記述データについて、自然言語処理による形態素解析処理および、それをもとにした対応分析を行ない、それぞれの世代、性別、移動パターン（定住者、Uターン者、他出者）による、回答傾向の差異を探った。分析の結果、希望に関しては、市内在住者は生活志向が強く、逆に他出者は開発を通じた発展志向が強いこと、Uターン者は市内にない生活インフラの整備を望む傾向が強いことが明らかになった。また釜石に関する誇りに関しては、同じ「鉄」に関連する語でも、他出者男性は「新日鐵」という近過去への言及が多く、市内在住男性は「近代製鉄発祥の地」というより長期の歴史に位置づけて語る傾向が強いこと、女性では、「自然」や「人間性」への言及が多いが、他出者はそれを物品や実際の人間関係などの具象に求める傾向が強く、市内在住者の方が抽象的な「豊かさ」に拠る傾向が強いという差異が明らかとなった。

キーワード

地域移動、Uターン、地域の希望、地域の誇り、ローカル・アイデンティティ

はじめに

岩手県釜石市を対象とする「希望学」地域調査では、地域における希望の再生には「ローカル・アイデンティティの再構築」、「希望の共有」、「地域内外でのネットワーク形成」が不可欠な要素であるという仮説が提示された。

本論文は、岩手県釜石市の県立四高校卒業生（1935年-1977年生）を対象とした調査票調査（以下、同窓会調査）¹⁾のデータ、とりわけ出身地である釜石への誇りと希望に関する自

1) 同窓会調査の概要については、永井[2009]も参照のこと。なお、調査対象である釜石南高等学校、釜石北

由記述回答の分析を行ない、そこから地域の希望、そして地域の誇り、それが共有されるとはどういうことかを捉えなおすことを目的とするものである。

I. 同窓会調査の目的と概要

高校卒業者の履歴と地域移動に関する研究を行なう場合、地域からの流出者を調査対象に含める必要がある。流出者を含めた過去時点の居住者のリストとしては、地域内の教育機関の卒業生名簿や同窓会名簿が適しているが、個人情報保護法施行後の現在では、リストを調査標本の抽出台帳とすることは、名簿の目的外利用にあたる可能性が高いため、第三者には利用自体が難しくなっており、また名簿自体の整備も止まってしまうケースも増えている。今回は、幸いにも市内の四高校同窓会の協力を得ることができ、同窓会大会にも諮ったうえで、名簿の利用が可能となったが²⁾、今後はこのような研究自体が困難となることも予想される。

同窓会名簿を利用した調査には、困難な問題も多い。まず、同窓会名簿が存在、整備されているかどうかのフィルタが存在する。伝統校でない場合、同窓会自体が組織されておらず、名簿が入手できない場合も多い。結果として、進学を前提とした伝統校に偏ったデータになってしまうという問題である。この点については、名簿整備の頻度・精度には差があるとはいえ、釜石市の四高校には、いずれも同窓会名簿が存在し、「釜石市出身の高校生」の全体像に近いリストを利用することができた。その点においても、本調査のデータは貴重なものとなっているといえよう。

別の問題としては、「高校卒業生」を対象とした時点で、高校に進学しなかった者、高校を卒業しなかった者、また市外の高校に進学した者——例えば、隣接地区から遠野高校や大槌高校に進学した者、下宿して盛岡市の進学校に進んだ者など——が調査対象から外れてしまうという点が挙げられる。とりわけ前者の問題は、本調査のように戦後50年の地域移動の動態の把握を目的とする場合、とりわけ大きな問題となる。なぜなら、高校進学が当たり前ではなかった時期の釜石出身者の多くが調査対象から外れてしまうからである。また、この問題は調査対象期間に高校進学率自体、さらには高校卒業という学歴の社

高等学校は2008年度より釜石高等学校として、また釜石商業高等学校、釜石工業高等学校は2009年度から釜石商工高等学校に統合されており、2010年1月現在、釜石市内に存在する高校は2校である。

2) なお、今回の調査では、各同窓会がもともと委託していた管理業者に対し、標本の抽出条件を提示し、その条件に該当するものを対象として、依頼状および調査票の送付を行ない、回収は無記名の郵送によって行っており、調査主体は抽出名簿および標本名簿を複写、作成を回避する形式で調査を実施した。

会的価値が大きく変わっており、同じ釜石〇〇高校の卒業生だからといって、同じ属性を持つものとして扱うことはできないという問題にも気づかせてくれる。したがって、今回の分析においては、どの高校を卒業したかという属性については、変数としては利用しなかった³⁾。

また、調査を実施するうえでもっとも大きな問題となるのが、名簿の整備状況と、調査協力へのインセンティブの確保である。特に卒業後市外に移り住んだものにとっては、同窓会や同窓生との縁は次第に薄くなりがちであり、こまめに同窓会組織と連絡を取っているものでなければ、地域移動の回数が増えるごとに追跡可能性は低下してゆく。したがって、卒業年の古い同窓生には、そもそも調査票の到達が困難であるという問題がある。また、比較的若年の同窓生については、社会調査自体への協力への動機づけが弱いという現在社会調査が共通に抱える困難もあって、回収率は低くなりがちである。

さらに、地域移動を果たした同窓生は、全国各地に散らばって居住しており、コストを考慮すると、調査方法としては、もともと回収率の低い郵送調査法に頼らざるを得ない。本調査も、回収率は3割弱と低い水準にとどまっており、標本データを釜石出身者の全体的な傾向ととらえることにはいくらかの留保が必要である。

II. 移動パターンとその傾向

同窓会調査の結果から、調査対象者は移動経歴にもとづいて3タイプに分類される。すなわち、高校卒業後も釜石に残り、調査時まで釜石内で生活を続けていたもの（以下「ずっと釜石」）、高校卒業後、何らかのタイミングで釜石を離れ、そのまま釜石外で生活しているもの（以下「現在釜石外」）、また、高校卒業後に釜石を離れたが、一定期間の後、再び釜石に帰って生活しているもの（以下「Uターン」）である。この移動経歴による3分類は、他出行動の発生の有無とUターン行動発生の有無という、2つの行動の組み合わせによって成りたっている。

釜石から出る他出のタイミング、また釜石に帰ってくるUターンのタイミングは、年齢層によっても異なる⁴⁾。図1の通り、男性の他出については、1944年以前生まれの世代では、高校卒業時点で釜石に残る者が48.4%、他出する者が51.6%と拮抗している。しか

3) なお、高校非進学者・中退者のリストの問題については、中学校の同窓会名簿を利用すれば一見解決できそうではあるが、中学校に関しては、高校以上に同窓会名簿の整備率が低く、また統廃合の頻度も多いため、網羅的なリストの入手自体が困難であって、やはり完全な解決方法とはなり得ない。

4) 詳細は石倉義博[2009]、および西野淑美[2009]を参照のこと。

図1 他出者の割合と他出時期（男性）

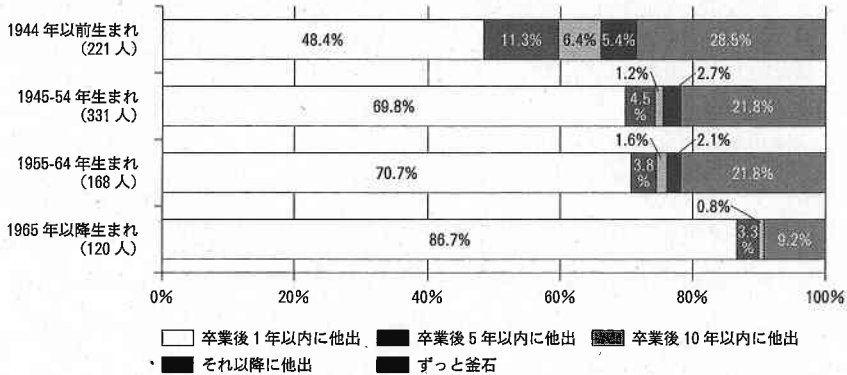
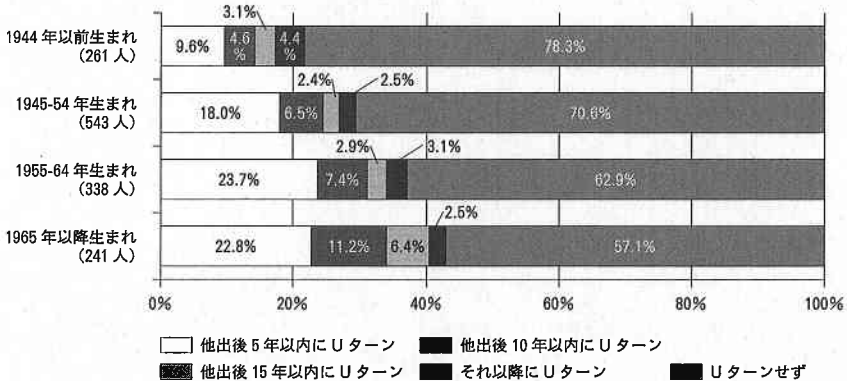


図2 Uターン割合とUターンの時期（男女）



し、その後の新日鐵釜石製鉄所の縮小とそれに伴う産業構造の変化の帰結として、他出が進行し、調査時まで釜石に住み続けていた者は卒業生の28.5%にとどまる。しかし、この世代が最も他出経験の少ないグループでもある。この次の世代、すなわち釜石の大幅な人口減の時代に高校を卒業した1945-54年生まれ、1955-1964年生まれの世代は、大学進学率の向上、また市内での高卒者の就職口の減少から、卒業後1年以内に7割程度が他出しているが、その後他出する者は10%に満たない。最後の1965-1977年生の世代は、86.7%が卒業直後に釜石を出ている。

女性の場合は結婚に伴う他出という特有の現象があり、他出する割合は多くの世代で男性よりも高いが、最も若い1965-1977年生の世代だけは、ずっと釜石に住んでいる人の割合が17.5%と、男性の9.2%という数字を大きく上回っている。

では、Uターンした人たちはいつ釜石に帰ってきたのであろうか。進学や就職のよう

な皆が同時期に経験する出来事とは違い、Uターンは比較的長期にわたって起きるが、いずれの世代でもピークは他出後5年以内であり、それ以降は鈍化、他出後10年をこえてのUターンは少数である。

世代別の特徴をみると、1944年以前生まれの世代は外に出る割合が最も低いのが、同時にUターンする割合も最も少ない。これは他出タイミングが他世代よりも遅いことも影響していると考えられる。またこの世代のUターン者には、他出先での引退後に釜石に終の棲家を求めた人も若干だが含まれている。続く1945-54年生まれ、1955-1964年生まれの世代では進学のために他出した人が多いが、卒業後にUターンするケースも多く、還流行動のピークは早まっている。最後の1965-1977年生まれは他出する割合が9割超と最も高い世代であるが、同時にUターンも活発である。この世代は他出後10年をこえてもUターンが続き、最終的に釜石に帰ってきた人の割合は最も高くなっている。若い世代には、一旦は外に出るが学業や経験を積んで戻って来るといったパターンが定着しているといえる。

出生コーホート、性別、そして移動パターンによる標本の構成は表1のようになっている。移動パターン不詳を除くと、移動パターンの構成は、「ずっと釜石」15.2%、「Uター

表1 生年コーホート・性別・移動パターンによる標本構成

			移動パターン				合計	
			ずっと釜石	Uターン	現在釜石外	不詳		
1944年以前生	性別	男性	度数	64	33	236	30	363
			%	17.6%	9.1%	65.0%	8.3%	100.0%
	性別	女性	度数	49	26	140	26	241
			%	20.3%	10.8%	58.1%	10.8%	100.0%
	合計		度数	113	59	376	56	604
%			18.7%	9.8%	62.3%	9.3%	100.0%	
1945-54年生	性別	男性	度数	72	99	279	10	460
			%	15.7%	21.5%	60.7%	2.2%	100.0%
	性別	女性	度数	50	64	313	20	447
			%	11.2%	14.3%	70.0%	4.5%	100.0%
	合計		度数	122	163	592	30	907
%			13.5%	18.0%	65.3%	3.3%	100.0%	
1955-94年生	性別	男性	度数	41	72	166	7	286
			%	14.3%	25.2%	58.0%	2.4%	100.0%
	性別	女性	度数	46	71	195	8	321
			%	14.4%	22.2%	60.9%	2.5%	100.0%
	合計		度数	87	143	361	15	606
%			14.4%	23.6%	59.6%	2.5%	100.0%	
1965年以降生	性別	男性	度数	11	58	89	3	161
			%	6.8%	36.0%	55.3%	1.9%	100.0%
	性別	女性	度数	28	56	111	7	202
			%	13.9%	27.7%	55.0%	3.5%	100.0%
	合計		度数	39	114	200	10	363
%			10.7%	31.4%	55.1%	2.8%	100.0%	
全世代	性別	男性	度数	188	262	770	50	1270
			%	14.8%	20.6%	60.6%	3.9%	100.0%
	性別	女性	度数	173	217	759	61	1210
			%	14.3%	17.8%	62.7%	5.0%	100.0%
	合計		度数	361	479	1529	111	2480
%			14.6%	19.3%	61.7%	4.5%	100.0%	

ン」20.2%、「現在釜石外」64.5%となっている。以下では、この3変数の組み合わせによって、釜石に対する希望のあり方、また誇りの帰属先の違いを探っていくこととしたい。

釜石出身者が望む釜石の将来像、そして何を釜石の誇りとして言及するかは、その人と釜石との現在の関わり方に依存することが予想される。

現在釜石に居を構え、そこに存在する諸条件——雇用状況、医療や福祉設備、商店の分布や品揃えなど——のなかで生活を組み立てていかなければならない者と、釜石の外から望ましい釜石の未来の姿を想い描く者とは、そのイメージがおおきく異なりうるし、また一度釜石の外で生活し、釜石の外の世界を知って、再び釜石に戻った者は、外との比較の視点も異なりうるだろう。また、釜石を離れ、その後の釜石との関わりの薄い者にとっては、釜石への記憶のなかから、希望や誇りの在処を探さねばならない。

Ⅲ. 自由記述回答の分析とその方法

このように対象者の属性による言及される希望や誇りの内容の差を測るため、統計的手法として対応分析（コレスポンデンス分析）を利用した分析を行なうこととする。これは、回答者の回答パターンをもとに、回答者の属性とカテゴリカル変数——ここでは、希望や誇りの内容として言及される語句——の各項目間を、その回答傾向の類似性によって序する分析手法で、ある属性をもつ回答者が言及しやすい語句があった場合、その語句と回答者属性は近い位置に置かれ、また、あわせて言及されることの多い語句群も同様に近い位置に配置される⁵⁾。

しかし、自由記述による回答の場合、質問-回答という形式ではなく、日常の語用に近い文章——テキストデータ——として対象者の回答が与えられる。したがって分析を行なうためには、何らかの手法によって、テキストデータを項目——例えば、「自然」や「新日鐵」など——に変換する必要がある。

かつては、分析者の手作業によって、自由記述から項目への反応に分類がなされていたが、近年ではコンピュータによる自然言語処理プログラムを利用することが多くなっている。本稿でも、テキストデータの前処理にあたってはTiny Text Miner (TTM) ver. 0.64⁶⁾、またテキストを品詞に分解するための形態素解析エンジンにはMeCab ver. 0.98⁷⁾を使用

5) これに類似する分析手法に数量化Ⅲ類がある。

6) 松村真宏と三浦麻子によるオープンソースソフトウェアである。詳細は松村・三浦[2009]を参照のこと。

7) 京都大学情報学研究所と日本電子電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所の共同開発になるオープンソースソフトウェアである。詳細は、<http://mecab.sourceforge.net/>を参照のこと。

した。

なお、MeCab および TTM による処理だけでは、同義語や表記ゆれ——「友人」と「友達」、「七連覇」と「V7」、「新日鐵」と「新日鉄」、「釜石製鉄所」と「釜鉄」など——を別の語として認識するため、項目数が多くなりすぎるうえ、別表記をとりにくい語が頻出語になってしまうという問題がある。また、誤記や誤字もそのまま別の語として分析されてしまう。そのため、文意を変えない範囲で、表記ゆれや誤字、誤記を修正し、また形態素解析の誤りを減らす目的で、適宜句読点、助詞等の追加を行なうとともに、同意語リストを作成した⁸⁾。また、釜石特有の語や固有名詞——「虎舞」、「焔釜」、「釜南」、「シーウェイブス」など——のキーワードリストも作成した。そのため、同義語リスト、キーワードリストの設定の仕方によっては若干分析結果が異なりうることをあらかじめ注記しておく。

IV. 「釜石の希望」をさぐる

希望とは、未来へと指向する人々の意識であるといえるが、それが個人のものでなく、ある地域のものであった場合、個人に尋ねたその内容はどのようなかたちをとるだろうか。おそらくそれは、自分自身が今後その地域とどのように関わっていくのか、あるいは地域がどのような状態であれば、自分の望むような状態であるのかといったものが表現されることになるだろう。

同窓会調査では、「あなたは「釜石」の将来に対する「希望」(将来実現してほしいこと・実現させたいこと)がありますか」という質問を行ない、そこで「ある」と回答した者に、具体的な「希望」の内容について、自由記述方式で尋ねている。したがって、自由記述への回答があるのは、何かしらの希望が釜石にある者のみとなる。なお、自由記述欄への回答者の属性別(出生コーホート・性別・移動パターン)の内訳は、表2の通りである。「希望がある」と回答した者で、自由記述を行なわないケースも存在するが、全体で46ケースと少数にとどまっており、ほぼ自由記述を行なった人を、釜石に対して希望を持つ人とみなしてよいであろう。

この「釜石への希望」に関する自由記述から、自然言語処理によって語句を抽出し、回

8) 最初はまったく同意語リストを設定せずに形態素解析を行ない、その後出現語群から判断して、類似性の高い語をひとつにまとめるという同義語リストづくりを行なった。例えば、「おいしい」の同義語群として「美味しい」「美味い」、「うまい」、「美味」を、また個人の性格・気質をあらわす語群として、「気質」、「人情」、「人間性」、「人柄」、「人情味」、「気っ風」、「気風」、「勤勉」、「まじめ」、「働き者」、「ぶっきらぼう」、「親切」、「誠実」、「素朴」、「やさしい」、「おおらか」、「純朴」、「根性」、「人間性」、「人間的」、あるいは魚の名前はすべて「海産物」という項目にまとめるなど、同義語リストを50個設定した。

表2 「釜石への希望」自由記述回答者の構成

			希望あり		希望なし	計
			記述あり	記述なし	非該当	
1944年以前生	男性	ずっと釜石	37	2	14	53
			69.8%	3.8%	26.4%	100.0%
		Uターン	16	0	13	29
	現在釜石外	55.2%	0.0%	44.8%	100.0%	
		114	5	95	214	
		53.3%	2.3%	44.4%	100.0%	
女性	ずっと釜石	33	2	5	40	
		82.5%	5.0%	12.5%	100.0%	
	Uターン	18	0	5	23	
現在釜石外	78.3%	0.0%	21.7%	100.0%		
	56	1	58	115		
	48.7%	0.9%	50.4%	100.0%		
1945-54年生	男性	ずっと釜石	39	1	21	61
			63.9%	1.6%	34.4%	100.0%
		Uターン	58	2	31	91
	現在釜石外	63.7%	2.2%	34.1%	100.0%	
		134	3	113	250	
		53.6%	1.2%	45.2%	100.0%	
女性	ずっと釜石	23	2	16	41	
		56.1%	4.9%	39.0%	100.0%	
	Uターン	42	0	8	50	
現在釜石外	84.0%	0.0%	16.0%	100.0%		
	163	8	109	280		
	58.2%	2.9%	38.9%	100.0%		
1955-64年生	男性	ずっと釜石	19	2	16	37
			51.4%	5.4%	43.2%	100.0%
		Uターン	36	3	24	63
	現在釜石外	57.1%	4.8%	38.1%	100.0%	
		97	1	55	153	
		63.4%	0.7%	35.9%	100.0%	
女性	ずっと釜石	34	1	8	43	
		79.1%	2.3%	18.3%	100.0%	
	Uターン	41	3	22	66	
現在釜石外	62.1%	4.5%	33.3%	100.0%		
	96	3	74	173		
	55.5%	1.7%	42.8%	100.0%		
1965年以降生	男性	ずっと釜石	7	0	4	11
			63.6%	0.0%	36.1%	100.0%
		Uターン	29	1	22	52
	現在釜石外	55.8%	1.9%	42.3%	100.0%	
		47	1	34	82	
		57.3%	1.2%	41.5%	100.0%	
女性	ずっと釜石	16	1	8	25	
		64.0%	4.0%	32.0%	100.0%	
	Uターン	35	1	18	54	
現在釜石外	64.8%	1.9%	33.3%	100.0%		
	59	3	41	103		
	57.3%	2.9%	39.8%	100.0%		
計		1,249	46	814	2,109	
		59.2%	2.2%	38.6%	100.0%	

表3 「釜石の希望」上位30語

語	件数	語	件数
活性化	285	福祉	77
若者	187	産業	72
雇用	164	スポーツ	66
交通	163	水産	65
観光	141	発展	61
医療	135	昔	61
人口	126	行政	55
充実	118	安心	49
自然	115	海	52
海産物	107	生活	51
企業誘致	103	新日鐵	50
高齢化	95	子ども	47
まちづくり	85	教育	47
レジャー	78	RP	47
買い物	78	文化活動	45

答のなかでも上位のもの30語(表3)に対して対応分析を行なった⁹⁾。

頻出する語としては、最上位にきたのが「活性化」であるが、これには同意語として「興隆」、「繁栄」、「活発化」、「活気」を含めてある。具体例としては、「産業の活発化(昔のように賑やかな街になってほしい)」といったものである。また、「漁業の復活。製鉄所の高炉再建と街の活性化」といった記述であれば、「活性化」の他に、表3の「水産」および「新日鐵」にも反応する回答としてカウントされる。

表3の頻出語と、回答者の属性(出生コーホート・性別・移動パターン)の組み合わせによる24属性)ごとの

回答件数による分割表を用いて対応分析を行なった。なお、ここではある語に言及した回答が何件あったかという件数を数値として用いた。語の出現頻度を使用する場合もありうるが、今回のようなデータにおいて出現頻度を使った場合、例えば魚の名前を列挙するよ

9) ただしとくに意味をなさない「釜石」や、「町」については上位にきた場合でも除外した。

うな回答に頻出語が引きずられる危険があるため、件数の方を使用した。

また、対応分析を行なうにあたって、解の次元数は2とした。これは次元数3で対応分析の寄与率を求めた際、次元2までの累積寄与率が $66.04+18.00=84.04$ と80%を上回っていたため、次元数を2とするのが適切と判断したことによる。分析の結果、各構成要素(頻出語)の得点は表4のようになり、また各カテゴリ(回答者属性)の得点として表5が得られた。さらに、構成要素とカテゴリを次元1の得点、次元2の得点にもとづいて二次元にプロットしたものが図3である。構成要素とカテゴリは得点のスケールが異なるため、プロットにあたっては、それぞれ次元1と次元2の正準相関係数(次元1が0.362, 次元2が0.189)を掛け、対称解を求めたものを使用した。なお、図3ではカテゴリ名がX113のような表記になっているが、これは表の見やすさを考慮し、出生コホート・性別・移動パターンの組み合わせを3桁表記にしたものである。カテゴリとの対応は表5を参照されたい。

それでは、図3からどのような傾向が読み取れるだろうか。対応分析においては、類似性の高い項目が近い座標にプロットされる。したがって近接した位置にある項目は同時に回答される頻度の高いものである。

表4 各構成要素得点(釜石の希望)

	次元1得点	次元2得点
活性化	-0.863697500	-0.799131379
若者	0.859258600	0.012183583
雇用	0.732430800	0.165010342
交通	-0.231131200	0.502280728
観光	-1.268486500	0.138475478
医療	1.910100500	0.772884998
人口問題	-0.301242300	0.769845412
充実	1.228039200	0.874294293
自然	-0.771402500	0.166411994
海産物	-0.190779800	-1.957542118
企業誘致	-0.448614700	1.974382780
高齢化	1.160632200	-0.608778008
まちづくり	-0.169929500	0.135655082
レジャー	1.025142100	0.565647859
買い物	1.358453500	-1.767957085
福祉	0.631880400	0.018236312
産業	-1.327592300	-0.206812511
スポーツ	-0.527583900	-0.350433090
水産	-1.926612800	2.185886463
発展	-1.221701000	0.431917315
昔	-0.890956700	-1.412177454
行政	-0.395956800	0.117574243
安心	1.858017900	0.025559964
海	-1.088355000	0.316487247
生活	0.961793600	-0.271183238
新日鐵	-0.825259800	0.003589007
子ども	1.477982400	-1.213294762
教育	-0.130226300	1.709008370
PR	-0.797776100	-3.444994324
文化活動	-0.439763900	0.043763465

表5 各カテゴリ得点(釜石の希望)

			次元1得点	次元2得点
1944年 以前生	男性	ずっと釜石 X111	0.68685676	0.72958209
		Uターン X112	0.30577857	0.97607696
		現在釜石外 X113	-1.44444571	1.51251533
	女性	ずっと釜石 X121	1.47701909	-0.55035301
		Uターン X122	0.87478554	0.10743378
		現在釜石外 X123	-0.71275371	-1.45227915
1945-54 年生	男性	ずっと釜石 X211	0.53375368	0.9070903
		Uターン X212	-0.60258138	1.37387815
		現在釜石外 X213	-0.90764714	0.14290865
	女性	ずっと釜石 X221	1.48495763	1.113939
		Uターン X222	1.04876026	0.35164973
		現在釜石外 X223	-0.6428461	-0.80878694
1955-64 年生	男性	ずっと釜石 X311	0.62975397	-0.08404465
		Uターン X312	0.57590952	1.53389783
		現在釜石外 X313	-0.94347878	0.38939532
	女性	ずっと釜石 X321	1.46588512	-0.03453507
		Uターン X322	2.27731258	0.35303774
		現在釜石外 X323	-0.44721094	-1.21723738
1965年 以降生	男性	ずっと釜石 X411	0.76398232	1.36531417
		Uターン X412	1.02914124	0.2046214
		現在釜石外 X413	0.09361633	1.05524053
	女性	ずっと釜石 X421	1.74660551	-1.45481037
		Uターン X422	0.92408146	-1.22547072
		現在釜石外 X423	0.28580207	-1.65392877

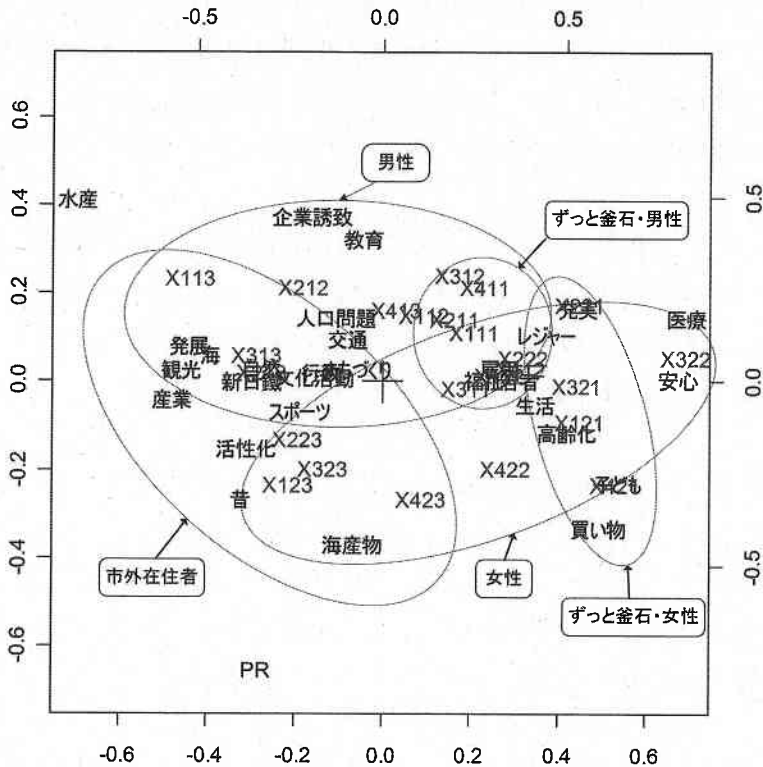


図3 対応分析の結果（「釜石の希望」）：次元1，次元2の得点による散布図（対称解）

例えば、X421 で表記される「1965年以降生まれ・女性・ずっと釜石」属性の回答者の座標はほぼ「子ども」に重なっている。ずっと釜石内で暮らし、市内で現在子育てを行なっている女性の主たる関心事が「子ども」であることがわかる。同世代女性でUターン経験者（X422）も比較的近い位置にプロットされている。

また、やはり「若者」と「雇用」の近さが興味を引く。実際の自由回答での記述においても「若者が戻ってきて働ける職場の確保」といった回答が目だった。この項目に近い属性は、釜石外との比較の視点をもって釜石内での就職活動を行なった経験を持つ「1965年以降生まれ・男性・Uターン」（X412）群である。

また、大きな傾向としては、企業誘致や福祉施設、レジャー施設など、生活インフラへの志向が強いのがUターン経験者、とりわけ男性であり、釜石にはないもの、あってほしいものへの希求が強い傾向がうかがえる。これに対し、「ずっと釜石」グループは、とりわけ女性において、老後や生活に関する項目への反応が強いが、それに対して、今現在釜石にはないものをもってくることによって改善しようとするよりも、今あるものを「充実」させようという志向が強い。

「現在釜石外」グループはほとんどが X 軸（次元 1 の得点）のマイナス方向にプロットされている。この領域にプロットされている要素には、「観光」、「発展」、「産業」、「新日鐵」、「自然」、「海」、「活性化」、「スポーツ」（ラグビーを含む）といったものが並ぶ。こちらは開発を通じた発展志向の強いグループであるといえよう。男女別でみると、男性が Y 軸（次元 2 の得点）のプラス方向に、女性がマイナス方向にきれいに分かれてプロットされていることも目につく。このグループのなかでも、「1965 年以降生まれ・男性・現在釜石外」(Xx13) は、U ターン経験者グループと近い位置にプロットされている。この世代は、現在も U ターン行動が発生しつづけており、いわば「U ターン予備軍」とも呼ぶべき存在であって、そのため U ターン経験者グループと近い傾向を示していると考えられよう。

次元 1 および次元 2 がそれぞれ何を意味する軸と解釈できるだろうか。次元 1 は、生活志向－開発志向の軸といえそうである。次元 2 は寄与率もそれほど高くなく、解釈が難しいが、設備（インフラ）志向－文化（イメージ）志向という解釈も可能だろう。そして回答者属性によって、現在釜石外の男性（Xx13）が開発・設備志向、現在釜石外の女性（Xx23）が開発・文化志向、U ターン男性（Xx12）が中立・設備志向、U ターン女性が生活・中立志向（Xx22）、ずっと釜石の男性（Xx11）が生活・設備志向、ずっと釜石の女性（Xx21）が生活（強い）・文化（弱い）志向に分類することができそうであり、市内で生活する「ずっと釜石」、「U ターン」グループと、市外から釜石をみている「現在釜石外」グループで、望ましい釜石の将来像に関する認識の差違が鮮明にみとれる。

市内在住者と市外在住者の、釜石への希望の傾向の違いは西野[2009: 193-195]においても指摘されていたが、対応分析においてもそれが裏づけられる結果となった。

V. 「釜石の誇り」の在処

未来へと向かう意識である希望と、釜石という地域の結びつき、そして属性によるその差違については前節でみたとおりであるが、では、過去あるいは現在へと向かう意識である「誇り」についてはどのような傾向がみられるだろうか。

同窓会調査では、「あなたは釜石について誇りに思うことがありますか」という質問を行ない、それに「ある」と回答した対象者に具体的な誇りの内容について自由記述形式で尋ねている。そこで、希望と同様に、この自由記述データを用いた対応分析によって、その所在を探ってみたい。

釜石への誇りについても、希望と同様、誇りが「ある」と回答した者のみ、自由記述へ

表6 「釜石の誇り」自由記述回答者構成

			希望あり		希望なし	計
			記述あり	記述なし	非該当	
1944年 以前生	男性	ずっと釜石	35	3	22	60
			58.3%	5.0%	36.7%	100.0%
		Uターン	13	0	17	30
			43.3%	0.0%	56.7%	100.0%
		現在釜石外	115	5	97	217
			53.0%	2.3%	44.7%	100.0%
	女性	ずっと釜石	27	0	17	44
			61.4%	0.0%	38.6%	100.0%
		Uターン	18	0	6	24
			75.0%	0.0%	25.0%	100.0%
		現在釜石外	68	0	55	123
			55.3%	0.0%	44.7%	100.0%
1945-54 年生	男性	ずっと釜石	34	2	27	63
			54.0%	3.2%	42.9%	100.0%
		Uターン	53	3	36	92
			57.6%	3.3%	39.1%	100.0%
		現在釜石外	150	8	102	260
			57.7%	3.1%	39.2%	100.0%
	女性	ずっと釜石	22	1	24	47
			46.8%	2.1%	51.1%	100.0%
		Uターン	35	1	22	58
			60.3%	1.7%	37.9%	100.0%
		現在釜石外	192	6	100	298
			64.4%	2.0%	33.6%	100.0%
1955-64 年生	男性	ずっと釜石	11	0	38	39
			28.2%	0.0%	71.8%	100.0%
		Uターン	35	5	30	70
			50.0%	7.1%	42.9%	100.0%
		現在釜石外	106	5	51	162
			65.4%	3.1%	31.5%	100.0%
	女性	ずっと釜石	20	1	23	44
			45.5%	2.3%	52.3%	100.0%
		Uターン	30	3	30	63
			47.6%	4.8%	47.6%	100.0%
		現在釜石外	111	7	67	185
			60.0%	3.8%	36.2%	100.0%
1965年 以降生	男性	ずっと釜石	5	0	5	10
			50.0%	0.0%	50.0%	100.0%
		Uターン	22	3	30	55
			40.0%	5.5%	54.5%	100.0%
		現在釜石外	50	5	30	84
			59.5%	4.8%	35.7%	100.0%
	女性	ずっと釜石	10	0	17	27
			37.0%	0.0%	63.0%	100.0%
		Uターン	31	3	21	55
			56.4%	5.5%	38.2%	100.0%
		現在釜石外	62	5	39	106
			58.5%	4.7%	36.8%	100.0%
計			1,255	65	896	2,216
			56.6%	2.9%	40.4%	100.0%

表7 「釜石の誇り」上位30語

語	件数	語	件数
自然	357	山	84
ラグビー	343	私	78
新日鐵	220	人	69
海	202	ふるさと	62
優勝	187	豊か	58
海産物	171	学校	56
おいしい	140	製鉄	47
鉄	137	食べ物	47
発祥	135	日本	45
歴史	125	繁栄	44
よい	121	野球	38
気質	115	川	33
近代製鉄	94	気候	32
製鉄所	87	人間関係	31
美しい	84	強い	31

の回答を促している。自由記述欄への回答者の属性別（出生コーホート・性別・移動パターン）の内訳は、表6の通りである。「誇りがある」と回答した者で、自由記述を行なわなかったケースは、全体で65ケースとこちらも少数にとどまっており、同様に自由記述を行なった人を、釜石に対して誇りを持つ人とみなして分析をすすめていく。

釜石の誇りについての自由記述から TTM および MeCab を使用して抽出した、出現件数上位30語が表7である¹⁰⁾。誇りの対称の上位にくるのは、「自然」（「自然環境」、「自然景観」等の同義語を含む）、そして「ラグビー」（「ラグビー部」、「ラグビーチーム」、「ラガーマン」を同義語として定

義）であり、「新日鐵」、「海」がそれに続く。「歴史」や「発祥」など過去志向のつよい言葉が上位にきていること、「気質」や「人」、「人間関係」などがみられるのも特徴的であ

10) こちらも「釜石」や「町」、「誇り」は除外した。

表 8 各構成要素得点 (釜石の誇り)

	次元1得点	次元2得点
自然	-1.317998210	-0.654273172
ラグビー	0.837505030	-0.147802408
新日鐵	0.691531060	0.512786510
海	-0.090655050	-0.117763522
優勝	0.686624500	-0.632298042
海産物	-0.119318050	2.040063473
おいしい	-1.153688660	1.947957847
鉄	0.996628910	-0.373583313
発祥	-0.287119560	-1.666675151
歴史	0.33990170	-1.082289016
よい	-0.672938910	0.451231984
気質	-0.373128800	0.546414968
近代製鉄	-0.456241310	-1.978083348
製鉄所	1.141794130	-0.256655890
美しい	-1.133116950	0.643375834
山	-1.249347660	0.068459858
私	1.498777160	1.117625583
人	-0.664424020	1.737812519
ふるさと	2.190679360	0.702289056
豊か	-1.313386060	0.018342139
学校	1.546502030	-0.095515153
製鉄	-0.349682560	-1.243128939
食べ物	-1.319208570	0.688233201
日本	1.329462240	-1.085181529
繁栄	0.926587200	-0.009961258
野球	1.674993200	-0.667313704
川	-0.693862290	-0.936918222
気候	-2.922323600	-1.631923466
人間関係	-0.231253470	1.817208786
強い	1.652053430	0.503319720

表 9 各カテゴリ得点 (釜石の誇り)

				次元1得点	次元2得点
1944年 以前生	男性	ずっと釜石	X111	-0.58495815	-1.14125905
		Uターン	X112	-0.54025013	-3.17747686
		現在釜石外	X113	0.96652942	-0.88644143
	女性	ずっと釜石	X121	-1.49950817	-1.06244259
		Uターン	X122	-1.26026150	-0.29588546
		現在釜石外	X123	0.98763587	1.01759101
1945-54 年生	男性	ずっと釜石	X211	-1.11745829	-1.53274411
		Uターン	X212	-0.26441258	-0.95580890
		現在釜石外	X213	1.27569705	-0.63603969
	女性	ずっと釜石	X221	-0.68924162	-1.31770463
		Uターン	X222	-1.45984069	-0.55050027
		現在釜石外	X223	-0.03928623	1.14582261
1955-64 年生	男性	ずっと釜石	X311	-1.42571879	-0.41640779
		Uターン	X312	-1.05832487	-0.39300613
		現在釜石外	X313	1.24916926	-0.24164286
	女性	ずっと釜石	X321	-2.13366856	-0.94834290
		Uターン	X322	-1.72835691	0.64364601
		現在釜石外	X323	0.11543132	1.02565263
1965年 以降生	男性	ずっと釜石	X411	2.00321690	-2.57146700
		Uターン	X412	-0.85746800	-0.61650755
		現在釜石外	X413	0.59867650	0.14080227
	女性	ずっと釜石	X421	-1.70473369	-0.25910823
		Uターン	X422	-1.61686404	-0.06787877
		現在釜石外	X423	-0.81090695	1.60747546

る。また、同窓会組織を経由して調査の依頼を行なったこともあり、「学校」(具体的な学校名を同義語とする)への言及も比較的多い。

表7の頻出語と、回答者の属性(出生コーホート・性別・移動パターンの組み合わせによる24属性)ごとの回答件数による分割表を用いて対応分析を行なった。対応分析の解の次元数は、解を3次元に設定した際の次元2までの累積寄与率が52.47+34.15=86.62%と、80%をこえていたため、2に設定した。

分析の結果、各構成要素(頻出語)の得点は表8のように、また各カテゴリ(回答者属性)の得点は表9となった。さらに、この次元1の得点、次元2の得点にもとづいて、対称解を求め(正準相関係数は、次元1が0.288、次元2が0.233であった)、構成要素とカテゴリを二次元にプロットしたものが図4である。

図4においても、現在の釜石住民(「ずっと釜石」,「Uターン者」)と、現在釜石外で暮らす者の間で、誇りとして言及される対象に大きな違いがあることがわかる。表7の通り、もっとも言及されることの多い「誇り」の対象は、「自然」と「ラグビー」であるが、前者は釜石住民、後者は釜石外住民に類縁性の高い語句であることがわかる。

また、「ラグビー」の周辺に位置する語句は、「繁栄」、「製鉄所」、「鉄」、「優勝」、「新日

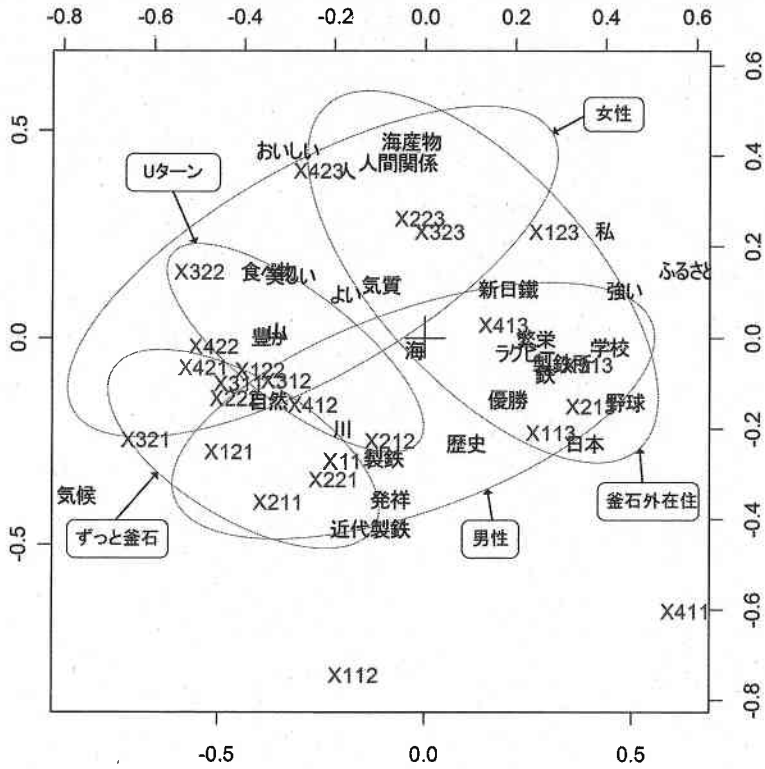


図4 対応分析の結果（「釜石の誇り」）：次元1，次元2の得点による散布図（対称解）

鐵」と、新日鐵を中心とする釜石の戦後の最盛期を想起させるものが並ぶ。そしてそのなかに現在釜石外の男性グループがプロットされている。

これに対し、もうひとつ鉄に関連する語句群が、「新日鐵」とは離れて存在する。「近代製鉄」、「発祥」、「製鉄」の一群である。こちらはより過去に遡った、釜石という都市の起源に関わる語句である。そして、その周辺に位置する属性カテゴリは、高年齢層の釜石在住男性グループ（X111, X211, X212）である。ずっと釜石に居住する戦後直後生まれの女性グループ（X221）もこれに近い位置にある。

比較的若い市内在住グループが誇りの対象に選ぶ傾向が強いのは、「自然」である。そして「自然」を境に「豊か」、「食べ物」や「美しい」の方向に振れるのが市内在住女性群、とりわけUターン経験者であり、1955-64年生、1965年以降生のUターン男性は「自然」のみを志向する傾向が強い。また、自然環境に関連する語句であっても、「海」が偏りなく言及されるのに対し、「山」や「川」への言及が多いのも市内在住グループの特徴である。

また、市外在住女性の特徴としては、「人間関係」のよさや「海産物」の「おいしさ」への言及が多いことが挙げられよう。

では、対応分析の二つの次元は、どのようなものとして解釈できるだろうか。次元1の得点に対応する X 軸は新日鐵—自然の軸、あるいは過去志向—現在志向の軸として捉えることができそうである。対する Y 軸は人間性—歴史性の軸として解釈できるように思われる。それ以上に、「気質」—「海」—「歴史」を結ぶ直線によって分断される市内在住者と市外在住者、「私」—「新日鐵」—「海」—「自然」を結ぶ線で分かれる男性と女性の意識の違いの方が目立つものとなっている。

また、釜石と「鉄」の関係をどう捉えるかという視点において、「新日鐵」関連語句と「近代製鉄発祥の地」に関連する語句の位置が離れているということにも着目すべきである。両者は「歴史」という語句を挟んで相対しており、前述のとおり「新日鐵」には他出者が、そして「近代製鉄発祥の地」には現在の釜石在住者が、それぞれ強く反応している。もちろん、両者ともに釜石の過去・来歴に関する言葉であり、釜石という都市の歴史を特徴づける有力なコアとなるものではある。しかし、同じ「鉄」に関わる語句にもかかわらず、回答者の反応パターンには大きな違いが存在する。これは、過去の事実をどのように、釜石の「歴史」のなかに位置づけるのかという問題、すなわち釜石の「ローカル・アイデンティティ」にも関わるものである。この問題については、次節で詳述したい。

VI. 地域の誇りと希望

同窓会調査の二つの自由記述データ——「希望」と「誇り」——の分析からは、地域の希望の対象、そして誇りの対象に関して、移動パターンによる差違、性別による差違が見いだされた。逆に世代差はそれほど大きくないことも分析を通じてわかったことのひとつである。では、この意識の傾向の差違をどのように捉えなおしていくべきだろうか。これをローカル・アイデンティティという観点から考えてみたい。

中村・玄田[2009:v]では、ローカル・アイデンティティを「地域の個性」、「地域の自分らしさ」と定義し、「希望の共有」、「地域内外でのネットワーク形成」と並ぶ地域における希望の再生に不可欠な要素に位置づけている。また、大堀研[2009a]は、ローカル・アイデンティティを「地域らしさ」と定義しつつも、同時に個人概念としての「アイデンティティ」——「自分らしさ」——を、地域に適用することに一定の留保を行なっている(大堀[2009a: 287])。

もちろん、「地域の個性」と言った場合、そこで想定されているのは、物理的な地域の特質——釜石地域の地質は〇〇で、水質は云々、市の中心部には製鉄所があって……——ではないだろう。それを地域の個性として、ローカルリティを代表するものとして、認識さ

れてはじめて、物理的な地域の特質は個性として同定される。

しかし、このように考えた場合、それを認識する主体は誰なのかという問題が発生する。例えば、個々人が、それぞれ個別に内心で「釜石は〇〇の町だ」と思っている、そのような状況も地域の個性の同定という意味では、ローカル・アイデンティティといえるだろう。だが、個人の認識のレベルをこえて、ローカル・アイデンティティの共通性、あるいはさらに一步進んでローカル・アイデンティティの共有ということを考えるのであれば、もう少し考察が必要だろう。

第IV節および第V節でみたように、何を釜石への希望、釜石についての誇りだと認識しているのか、そこには一定の共通性が確認される。とりわけ後者は多くの人々をもつ「地域の誇り」、ローカル・アイデンティティに近似したものであるといえる。しかし、われわれは共通性ととも、希望や誇りとして言及される語句の傾向に、属性による差違があることも同時に確認している。このような差違が存在するなかで、どの程度の共通性があれば、認識が共有されているといえるのか、そこではどの程度の差違が許容されるのか、また共有の範囲をどこに求めるのか——現在の釜石住民への共有を前提とするのか、他出した釜石出身者にまで共有される必要があるのか——を考えるならば、地域の希望や誇りの内容の共有を目指すのは現実的ではないだろう。

むしろ、ローカル・アイデンティティは、地域の希望や誇りの内容の共有ではなく、「われわれ」という共同性や連帯感覚の醸成、共有に関わる概念として捉えるべきではないだろうか。例えば、観光地としてのキャラクターづけをしようとして、対外的な地域イメージを統一的につくりあげ、キャンペーンをはることは可能だろう。しかし、それはあくまで観光地という商品の、その商品イメージとしてのふれのなさであって、それが成功するためには、そのイメージを売り手の側が共有することは必ずしも必要ではないし、また観光地だからといって、住民のすべてがテーマパークのキャストのように、統一的なイメージにもとづく役に配され、それに従って行動する必要もない。地域全体をテーマパークとして観光地化するようなまちづくりを目指すのでなければ、地域の希望の内容、そして地域の希望の内容のずれは、むしろ多様性として、それを語ることを促しうるものである。

かつて辻村明[1984]は、地方の誇りを「お国自慢」を可能にする素材として位置づけた。ここでいう「お国自慢」とは、「地域の誇り」を語ること、すなわちコミュニケーションのプロセスである。辻村はそのように論じてはいないが、その場合、重要なのは自慢しあう関係によって地方どうし、あるいは地方と大都市が結ばれることであって、誇るべき内容の重要性は副次的なものとなるはずである。別の場所で筆者も、地域の誇りを語る際に重要なのは、誇りのコアとなる事象——伝統や文化——の明確化ではなく、その変形を伴う継承——語り——のプロセスであり、「そういった継承のプロセスを失えば、多くの

「伝統」や「文化」をコアにまちづくりをすすめる地域のように、「担い手」間の集団としての凝集性を一時的に高めはしても、結果として「担い手」と一般の人との乖離が生まれ、また「担い手」も固定化された「伝統」と、生きられた継承プロセス——たえざる再解釈——の不在というギャップを生きざるをえない」（石倉[2009: 234]）と論じた。ローカル・アイデンティティも同様に、語る相手との連帯、ネットワークの構築・再構築を促すものである。

第V・VI節でみたように、釜石に対して人々が望む将来の姿——地域の希望——や、何を地域の誇りに位置づけるかには、属性による傾向の違いが存在する。例として挙げれば、「釜石の誇り」において、「新日鐵」は他出者の、そして「近代製鉄発祥の地」は市内在住者の、それぞれの誇りの言及対象となっていた。そのような違いがあるとしても、同窓会調査の協力者となったことからわかるとおり、他出者は外から釜石を想い、気にかけている存在である。「新日鐵」と「近代製鉄発祥の地」を、それぞれ過去の偉業として単独のモニュメントとするのではなく、その中間に位置する「歴史」の流れに位置づけなおすことができるように、両者は断絶するのではなく、対話によって結ばれる可能性もっている。誇りや希望の言及対象・内容に存在する差違を、地域の多様性として活かし、外部へも開かれたネットワークを作りあげていくのか、あるいはネットワークの断絶を生む意識のギャップに止まってしまうのかは、対話と継承の機会が確保されているどうかにかかっている。そしてそれこそが、「ローカル・アイデンティティの再構築」につながるものではないだろうか。

参考文献

- 石倉義博 (2009) 「地域からの転出と「Uターン」の背景：誰がいつ戻るのか」東大社研他（編）『希望学3：希望をつなぐ』東京大学出版会，pp205-236.
- 永井暁子 (2009) 「同窓会調査の概要とその重要性」東大社研他（編）『希望学3：希望をつなぐ』東京大学出版会，pp149-161.
- 中村尚史・玄田有史 (2009) 「はしがき 地域の希望を考えるために」東大社研他（編）『希望学3：希望をつなぐ』東京大学出版会，pp iii-xviii.
- 西野淑美 (2009) 「釜石市出身者の地域移動とライフコース：釜石を離れる・釜石に戻る」東大社研他（編）『希望学3：希望をつなぐ』東京大学出版会，pp163-203.
- 松村真宏・三浦麻子 (2009) 『人文・社会科学のためのテキストマイニング』誠信書房.
- 大堀研 (2009a) 「グリーン・ツーリズムが育てるもの」東大社研他（編）『希望学2：希望の再生』東京大学出版会，pp269-296.
- 大堀研 (2009b) 「ローカル・アイデンティティ概念の検討」『「希望学」プロジェクト釜石調査ディスカッションペーパー』Vol.62.
- 辻村明 (1984) 『地方の誇り：文化逆流の時代』中公新書.